

児童文化財にみる子どものことばと“育ち” —加古里子さんの絵本からみる非認知能力—

前 正 七 生

(2019年1月17日受理)

要 旨

本稿の目的は今般の幼稚園教育要領や学習指導要領改訂の背景にある、従来の学力論に対する形で顕著になってきた新規の内容（コンピテンシーや3つの学力等）に関して、とりわけ思考力や非認知能力といわれる事項について整理し、その実際を明らかにすることにある。また、この度の幼稚園教育要領（並びに保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領）施行に際し、領域「言葉」の内容から新規の「資質・能力」として強調されているもの—特に主体的・対話的で深い学び、学びに向かう人間性、他者との協働（伝え合い）に纏わる内容等—について、幼児期における思考力や言葉の育ちとの関連性において整理し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示すものについて検討を試みる。

幼稚園教育要領の目指すところ、即ちA I 隆盛の次代を想定した人間形成の根幹に、人間独自の機能である言語—思考に繋がる力、意欲、よみ・きく（伝える）といった、幼児教育における領域「言葉」に示された内容—がどのように関わるのか、この国が目指す「人間形成の方向性」とそこに対して領域「言葉」が示すものについて、絵本作家として過去70余年にわたり子どもの本質に向き合い、「非認知能力」を育むことの重要性、遊びの大切さを伝え、語り、著し続けてきた絵本作家の加古里子さんの作品と彼の思想を手掛かりに考察した。

キーワード 幼稚園教育要領、保育内容、領域「言葉」、新学力観、児童文化財

I はじめに

平成30年度施行、本格実施の幼稚園教育要領および保育所保育指針改訂が目指すところは、幼児教育としての共通性を確保することと乳児保育から小学校接続までの発達と学びの連続性を明確にすることの2点だといわれてきた¹。また改訂のポイントとしては次の5つ—①乳児保育・3歳未満児保育の記述の充実（3つの視点）、②「養護」の意義の強調、③幼児教育を担う自覚とそのため計画・評価の力（教え—学びの関係性、学ぶことそのものの質的な変容）、④子育て支援の充実（待機児童・親支援の継続と充実）、⑤大きな災害への備

1

え(危機・安全管理)、⑥「職場」づくりと「キャリアパス」づくり(保育者の質・保育の質の問題)一が挙げられている。

その中でも上記②「「養護」の意義の強調」とは、児童の最善の利益の視点で子どもが安心できる環境の保障を意味し、幼児期にとどまらない「安心して学びに没頭できる」環境、生涯に亘る学び(学びに向かう人間性の涵養の基礎)の重要性を示すものである。同様に③「幼児教育を担う自覚とそのための計画・評価の力」とは、教えー学びの関係性が根底から覆っていること、学ぶことそれ自体に関する本質的な変容を意味するものでもあるⁱⁱ。

今回の幼稚園教育要領・保育所保育指針では、「学習指導要領」改訂に併せ、1990年代以降の新学力観の台頭と情報化・急速なグローバル社会に教育が如何に向き合っていくか、その“具体的な”未来像に対応する内容も含まれているⁱⁱⁱ。例えば、①知識の「爆発」と質の変化、②生涯に亘り「真に」学ぶ姿勢、③主体的・対話的で、深い学び等「学力の3要素」に関する事項がそれぞれのキーワードとして、A I(特に汎用人工知能)のもたらす社会的・経済的な変化・生活と連動する形で示されている^{iv}。1872年の学制、1947年の教育基本法の成立に次ぐ近代以降の我が国教育史上3番目の大改革とも言われる所以がそこにある。

本論では幼稚園教育要領・保育所保育指針改訂の背景にあるもの、特に「新規の」内容に関して整理・その特質を明らかにする。同時にこの度の幼稚園教育要領改訂に伴う「領域言葉」の内容から、新規に強調されているもの一特に思考に繋がる力の形成、主体的・対話的で深い学び、他者との協働(伝え合い)に纏わる内容一に焦点をあて、この度の改訂で示され一時的な議論を生じている「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の意味とその実効性を非認知能力との関連性において整理する。今回は、その手掛かりとして今年5月に亡くなった加古里子さんの著作とそこに著された思想ー真剣に子どもと向き合い、子どもの本質と遊びについて考え抜いたーを紐解くことによって試みる。A Iとグローバル化が喧しい昨今故に、A I文化(=A Iにできないことが重視される)における「人間独自の力」とは何か、加古里子さんが拘った「子どもが持っている力」について考える^v。

同時に、新学力観の求める資質・能力(社会人基礎力や3つの学力)や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の内容から「興味を持つこと」「考えること」に注目し、この国が目指す「人間形成の方向性」と今後どのようにかわっていくのか、あくまでも概略的にてはあるが触れていきたいと思う。

II 幼稚園教育要領 領域「言葉」の現在的意義

2

II-1 言語の獲得に関する領域「言葉」の内容と取り扱い

I はじめにで触れたように、今回の学習指導要領、幼稚園教育要領改訂を契機とする、昨今の出版物で多かれ少なかれ意識されているのが、A Iによってもたらされる社会生活の変化についてである。そしてそこには元来人間がもつと言われてきた価値(生)との間の揺らぎ、いわば「機械 vs 人類」のシナリオの延長線上にある人間の「有用性」への不安が大なり小なり含まれていることは強ち誤りではないだろう。

今後、幼稚園教育要領等、国の基準が示すところ、即ち2030年以降の「時代」を想定した人間形成の根幹に、A Iに比して人間優位の機能である言語^{vi}ーよみ・きく（伝える）、考えるといった、領域「言葉」に示される内容（もはや、強いA I＝汎用性人工知能が完成すると一概に言えなくなってしまう部分もあるが、あくまでも現時点で）ーがどのように関わるものなのか、『幼稚園教育要領解説』の内容にもそれは示されている^{vii}。身体性や自然言語、言語活動における意味形成については、それが明白なA Iの壁として存在することを、新井紀子はじめ多くの人工知能に関する研究者が指摘するところでもある^{viii}。

こうした幼稚園教育要領（保育所保育指針等）において、よみ・きく（つたえる）という言葉に纏わる内容（＝行為）がこれからの「時代」でどのような意味を持ってくるかについては、その『解説』においても改訂の基本方針として③「主体的・対話的で深い学び」⑤言語能力の確実な育成、伝統や文化に関する教育の充実、体験活動の充実などが示されており（下線筆者）、言語と身体つながり、所謂“直接的な”体験等の身体を伴う「やってみる」「試してみる」行為、それによって育まれる語彙の増加と言葉の機能の拡充が重視されている。例えば 幼稚園教育要領 第2章 第2節 4 言葉の獲得に関する領域「言葉」の「ねらい」と「内容」を俯瞰することでそれはより明確となる^{ix}。（下線筆者）

言葉

「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。」

1 ねらい

- (1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- (2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
- (3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。

2 内容

- (1) 先生や友達の言葉や話に興味や関心を持ち、親しみをもって聞いたり、話したりする。
- (2) したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。
- (3) したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。
- (4) 人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。
- (5) 生活の中で必要な言葉が分かり、使う。
- (6) 親しみをもって日常のあいさつをする。
- (7) 生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。
- (8) いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。
- (9) 絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。
- (10) 日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。

また、「内容の取扱い」で、それらはより具体的に幼児期に必要な「経験」、「留意する」べき事項として示されているが、「誰か」と日常生活の中で、「対話的」「応答的」に、「想像」「思考」等、言葉を用いて誰かとの間で考えを巡らせることこそが「言葉」の領域では重要なのだとわかる。

3 内容の取扱い

上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。

- (1) 言葉は、身近な人に親しみをもって接し、自分の感情や意志などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して次第に獲得されていくものであることを考慮して、幼児が教師や他の幼児とかかわることにより心を動かすような体験をし、言葉を交わす喜びを味わえるようにすること。
- (2) 幼児が自分の思いを言葉で伝えるとともに、教師や他の幼児などの話を興味をもって注意して聞くことを通して次第に話を理解するようになっていき、言葉による伝え合いができるようにすること。
- (3) 絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。
- (4) 幼児が日常生活の中で、文字などを使いながら思ったことや考えたことを伝える喜びや楽しさを味わい、文字に対する興味や関心をもつようにすること。

もはや説明不要の感もあるが、上記「幼稚園教育要領」に示されているのは、その幼児期の特性として身体若しくは「行為」(＝遊びであり、他者との対話的で応答的な“かかわり”やコミュニケーション)を伴う中で育まれる言葉の重要性である。いわば、そういったプロセスにこそ、幼児期の言葉に纏わる経験の意義があるということである。

これまで汐見稔幸や秋田喜代美らによって幼児期の教育に関し最前線で語られてきた内容だけでなく、その他の言語発達に関する研究が示しているように、「教えようとしてもおぼえません」(広瀬友紀『小さい言語学者の冒険』)というのが、言葉の本質(少なくとも幼児期においては)である^x。補足的に言えば、保育者なり親なり周囲の大人や友達などの「誰か」、他者をくぐる(対話と応答的な関係)なかで育まれるものが、次章以降で触れる「非認知能力」と関係の深い「生きた」「意味を持った」言葉なのである。

4

II-2 「統合知」としての「言葉」の育ち

先述したように幼稚園教育要領で示される幼児期の経験の総体としての「言葉」とその獲得のプロセスについては、ピアジェ (Piaget. J) やヴィゴツキー (Vygotsky) ら子どもの認知発達に関する研究、例えば、「内言と外言」に関して累々に扱われてきたといってもいいだろう^{xi}。しかしながら、この度の幼稚園教育要領では従来の言語の認知的な側面よりも非認知能力にかかわる内容が強調されてきている^{xii}。

「幼稚園教育要領解説」にも「幼児は親しみを感じている教師や友達の話や言葉に興味や関心を持ち、自分から聞くようになり、安心して自分の思いや意志を積極的に言葉などで表現しようとする」、「幼稚園においては、周囲の教師や友達が使う様々な言葉や表現に興味や関心を持ち、自分でもそれらを積極的に使ってみることによって、お互いの思いや意志をよりの確に伝え合えるようになっていく過程が大切である。」^{xiii}と記されているように、今後も認知的な機能以上に「コミュニケーション能力」や「協働性」につながる言語の社会情動的な側面が重視されていく傾向にある。

しかしながら、そういった言語の非認知面に焦点が当てられる今だからこそ、幼児期の言語の獲得の過程を蓄積・累積型の発達や暗記や「教わる」ことで言葉が増えるという既存の見方から距離をとることが必要となるだろう。言語処理や習得済みまたはその途上の言葉の知識が言語理解の現場でどのように用いられるかに詳しい言語学博士の広瀬友紀は『小さい言語学者の冒険』の中で、幼児が言語を獲得する際に行っている自身の葛藤、言葉との格闘、失敗と思ひ込み、「納得して」「わかっていく」プロセスについて数々の事例を用いて説明している^{xiv}。

そこでは「教えても覚えない」子どもの言葉の仕組み、例えば、子どもたちがひとつひとつの文や単語の使い方を大人の手本からまねることによってのみ身に付けるのではないこと、むしろ使われている言葉を見て、聞いて、自分でことばの規則や法則性を見出し、それを「実践」-「高度な失敗」と広瀬は呼ぶ-することで、「わかり」・「納得する」過程を経ることで「使えることば」に昇華することが記されている^{xv}。子どもたちは大人が気にも留めない母国語の文法や大人であれば無意識にやりすごすであろう複雑な発音規則を「高度な失敗」(＝試行錯誤と経験)の中でまさに“身に付けて”いる。

この子どもたちが無意識に行っている言語を獲得する際の「高度な失敗」は、次の佐伯 胖が説明する幼児期における学びの特徴(教えられるのではない)、そしてそこにある「知の本質」(大人、子どもに関係ない在り様)によっても言い換えられる。

『統合規則』と『自然に決まる』の意味の違い……(中略)……分析による統合の知は教えられないと得られない。教えられるということを使わないと得られないのです。これに対して、『統合による分析』は、自分でどんな話なんだと模索することによって「だったらこういうことなのね」と分かる「知」なのです。……勉強と学びの違いを「知」の違いとしてみると、『教示』に従って獲得する『知』、すなわち分析による『知』は、言われたことから分かることで組み立てるものであり、自分で探索し確認する『知』、すなわち統合による『知』は、「なんだろう、こうかな」からやっぱりそうなんだと納得するものです。」^{xvi}

5

論旨が拡散するのでここでは引用も最小にとどめるが、子どもが言葉を獲得することとはまさに佐伯 胖のいう「統合による分析の知」の集積なのである^{xvii}。認知過程における教えと学びについて長年示している佐伯 胖が何度も繰り返すように「覚えたことは忘れるが、わかったことは忘れない」と同じ仕組みで、生涯に亘り自分にとって必要な言葉を本当の

意味で「身に行けて」いくのが子どもである。広瀬の示す通り「教えても覚えません」というのが子どもの言葉の本質とっていいだろう^{xviii}。まさに「わかりたい」がために学ぶ、「向善」的な存在であるが故の、失敗の繰り返し＝「高度な失敗」を敢えてするのが子どもなのである。

「私が考える勉強と学びの定義とは、『勉強』＝教えに従って『身につけるべきこと』を身につけること。『学び』＝自分から『こうありたい』自分になること。』^{xix}

こうした幼児期に子どもが言葉を獲得し、単語だけでなく、見えない文法やルールについて「わかっていく」プロセスには、佐伯の言う「納得しーわかる」仕組みが明白に存在する。

「私たちは「納得できない」からこそ探求という活動をする。何とかして納得しようと、情報を集め、仮説をたて、実験もする。……「理解する」ということは「想起できる」ことでもないし「課題を解く」ことでもない。ほかならぬ納得をすることである」^{xx}

「子ども自身が興味をもったこと、楽しい、知りたいと思ったことを、自らの身体と遊びという直接の経験を通して確かめる」こと、そしてそれをどうやったらできるか思考し、周りの人と共有し実現していく過程を、幼児期の学びがもつ「見事さ」「すごさ」として賞賛すべきだと佐伯は言い続けてきた。子どもたちは知りたいこと、やってみたいことを他の誰でもない「自分のこと」として、自分の身体と直接の経験の中で、誰かの手を借りながらも伝え合い認め合う。そして、「なるほど……」と実感を伴い「納得」できるまでおこなう。この意味でも子どもが言葉を「身に付けて」いくことは「真の学び」と言ってよいだろう。

Ⅲ 新学力の時代と非認知能力の台頭

Ⅲ-1 学力論と新学力観への転換

1989年の五領域移行後、子どもの自発性や能動性、主体的な活動は環境と遊びを通し、保育者の適切ななかかわりによって徐々に現れてくること、子どもの心情や興味・関心などもそれに呼応して育ってくること、それらが周囲の大人の励ましや見守る視線など、直接的・間接的ななかかわりの中で広がり、それを他者と共有したり伝えたりという関係性を通して、「能動的な」自己が発揮されていくプロセスが重要であることは基本線として変わっていない。そこではいわば、子どもたちの意欲・心情を育む環境（時間、場、モノ、人）が重要であることも明示されてきた。1989年の改訂以来、幼児期の教育に携わる者にとって半ば自明であったこれらのこと（子どもたちが主体的、能動的に、心情・意欲を育み興味・関心を広げていくために、保育者自らもその「資質・能力」としての主体性と能動性を発揮し、環境と遊びのなかで展開される生活と「学び」を保証する）が、改めてこの度の改訂、教育改革の流れの中で顕在化し強調された背景には、世界的な新学力観への移行に伴い、高等教育

から初等教育まであらゆる学校段階も同様に教科的なものから領域へ「完全に」移行したいと考える文部科学省の意図があると考えられる。

戦後長きに亘り我が国の教育界を支配してきたのは、ひとつは「教育が目指すものは知識の量的拡大なのかそれを運用できる「力」を育てるのか」という実質陶冶VS形式陶冶の議論、二つ目は「教育が教える内容は系統的な知識なのか興味・関心に基づく経験か」という系統主義VS経験主義の学習理論とカリキュラム実践における議論であった。

そういった二項対立的などちらかに振れ、エンドレスに繰り返される議論についてはもはや「興味・関心に裏付けられていない一夜漬けの知識は消失する」、「知識・事実に基づかない興味・関心は何にも繋がらない」という、従来の知識偏重主義と知識を否定する経験主義、双方の陥穽が自明となっている^{xxi}。

「知識から離れては、問題解決・探求のみならず、関心・意欲・態度も形成されないこと、また、「関心」は知識を基に予測や仮説が証明されることでさらなる意欲へと広がっていく」という第三の学力観が主流となりつつある今日において「知識と興味・関心などの心情を分離できない」のは幼児期に限ったことではない^{xxii}。

世界の幼児教育制度と動向に詳しい北野幸子は、「幼児期が元々もっている領域性と子ども自身の心情や興味・関心をベースに構築される主体性・能動性こそが、幼児教育の特性であり單元ごとに到達目標が決まっている小学校以上の教科とは質的にも方法的にも異なる」とし、30年間に亘り、子どもの主体性を前提とする「心情、意欲、興味・関心」を育てることに注力してきた幼児教育（幼稚園教育要領や保育所保育指針の先見性）が今や、全ての教育段階に必要とされていると指摘する^{xxiii}。

Ⅲ-2 非認知能力と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

幼児期の教育は、教科を中心とする小学校以上の教育と違い、遊びを中心とした生活を通じ生涯にわたる人格形成の基礎を培うことが基本とされてきた。現行の幼稚園教育要領では「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」という五領域が示され、それらをバラバラに指導するのではなく、さまざまな体験を積み重ねるなかでお互いを関連させながら、徐々に育むことになっている（上述した通り北野幸子も佐伯 胖も言っている）が、その一方で、「小1プロブレム」に代表されるように、幼児期の教育と小学校教育との円滑な接続も大きな課題になっており、今回の改訂では、幼小接続にとどまらず、高校卒業までを一貫した学びの過程として、さらには大学や社会などとの接続まで見越して「育成すべき資質・能力」を明確にしていこうとしている。そうした流れの中で幼稚園教育要領では五領域を維持しつつも「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として10の事項を示すことになった。

- | | | |
|-----------------|---------------------|------------|
| 1. 健康な心と体 | 2. 自立心 | 3. 協同性 |
| 4. 道徳性・規範意識の芽生え | 5. 社会生活との関わり | 6. 思考力の芽生え |
| 7. 自然との関わり・生命尊重 | 8. 数量・図形、文字等への関心・感覚 | |
| 9. 言葉による伝え合い | 10. 豊かな感性と表現 | |

この「10の姿」の育成は小学校教育の前倒しではなく、むしろ幼児期の豊富な体験によって身に付けた学びの基礎がグラデーションのように小学校の各教科へとつながるようなイメージであり、そこにあるのは心の基盤である「非認知能力」の上に知識や技能が成り立つという考え方である。国際的に「社会情動的スキル」「非認知能力」を幼児期にしっかりと育むことが、生涯の学びにとって重要だと指摘されている^{xxiv}。幼児期に身に付けた多様な力が、小学校以降の学びにつながっていく複雑なメカニズムが明らかになりつつある中で、示される「学びに向かう力」は育成すべき資質・能力としても重要な役割を占めると言われている^{xxv}。

その著『幼児教育の経済学』で、J. ヘックマンによって非認知的能力は世の知るところとなったが、例えば、目標に向かって頑張る力、他の人とうまく関わる力、感情をコントロールする力など「人間として生きていくために必要な力」と言われている。従来の「学力」指標とされてきた、数がわかる、字が書けるなど、IQなどで測れる力を「認知的能力」と呼ぶ一方で、IQなどで測れない内面の力を「非認知的能力」と呼ぶ。今般、非認知的能力が注目されている理由は、簡単に言えば、幼児期に認知的な能力を高めることがその後の人生の成功や安定につながっているのか調べた結果、あまり関係がないことがわかってきて、むしろ、うまくいかないときに諦めないで「どうしてかな」「こうやってみよう」「これがダメなら、ああやってみよう」など、あくまで目標の達成まで頑張る姿勢や我慢できること、感情をコントロールする力などの方が大切だということがわかってきたからである^{xxvi}。

この非認知能力は、子どもの自発的な部分（自発性・能動性）を大切にすることで伸びるとされており、させられるのではなく、自分からやっていく中で育つと言われる。特に、幼児期の場合は幼児期の教育において重視されてきた遊びを通して育まれる。汐見稔幸が言うように、子どもたちは遊びこむ中で、やる気、意欲、粘り強さ、探求していく力が身につけていく^{xxvii}。この非認知能力が育まれる「遊び」の本質について汐見は次のように言う。

「……失敗も大事な経験です。それは「どうしてこうなっちゃったのかな」と考えることにつながる。そして、次はこうしてみようかな、と思う。このように遊びの中では、「自分で考える」「工夫する」という行為が生まれます。実は「考える力」も運動や絵などと同じく、繰り返し実践することで、向上していくものなんです。つまり、あそびは「考える力」や「工夫する力」も育ててくれる。子どもの頃に身に付けたそれらの力は後々も活かすことができますよ」

8 「大人があまり介入せず温かく見守る姿勢は本当に大切です。遊びに「ねばならない」はありません。子ども本人が「したい」思ってやるのが遊びです。……中略……失敗なんか気にしないで遊びなさい、子どもはそうした雰囲気の中で遊ぶことで、自分はありのままでもいいんだという自己肯定感、そして試行錯誤を否定されないことで、知恵を絞ってやればなんとかなるといふ自己有能感を得ることもできます。わかりやすい言葉で言うと「折れない心」「あきらめない力」が育まれているのです」^{xxviii}

遊ぶことは「考えること・アタマを使うこと」、遊びの中で重ねる失敗は「あきらめない・折れない心」……。この「非認知能力」を育むことの重要性、遊びの大切さを70年余伝え、語り、著し続けてきたのが今年亡くなった絵本作家の加古里子さんである。

IV 加古里子さんの絵本に表れた子どもと「非認知能力」

加古里子さんについての説明はもはや必要ないだろう。戦後、日本を代表する絵本作家であり、終戦直後のセツルメント運動、児童会活動からスタートした子どもの生活と子どもの遊びに向けられた慧眼、何をさて置いても子どもを第一に考えた本物の「子どもから学ぶ」姿勢は我が国における児童文化の世界でも稀有の存在と評される。

前章で取り上げた「非認知能力」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（いわゆる10の姿）についても、加古さんの絵本、作品に全て網羅されているといっても言い過ぎではない。幼児期に育まれることが必要とされる「心情、意欲、興味・関心」全てを包含する加古さんの絵本は誰もが一度と言わず“何度も”触れてきたはずである。この加古里子さんの、絵本界随一の卓越さについて、福音館書店社長（当時）で編集者の松居 直は梅棹忠夫の『知的生産の技術』を引き合いに出してこう記す。

「知的生産とよんでいるのは、人間の知的活動が、なにか新しい情報の生産に向けられているような場合である。……中略……つまりかんたんにいえば、知的生産というのは頭をはたらかせて、なにかあたらしいことがら—情報—を人にわかるかたちで提出することなのだ、……中略……“人間の知的活動を教養としてではなく、積極的な社会参加の仕方としてとらえようというところに、この「知的生産の技術」という考えかたの意味もあるのではないだろうか”加古里子さんの科学絵本、知識の本は、こうした意味での今日的価値を豊富にもっていると考えてよい。このような知的な所産としての絵本が日本にはあまりにも乏しいと思う。」^{xxix}

『だるまちゃんとてんぐちゃん』に代表されるだるまちゃんシリーズ、『からすのぼんやさん』『どろぼうがっこう』『とこちゃんはどこ』などのロングセラー、誰もが知っている人気の絵本だけでなく、『あそび読本』など日本の昔ながらの遊び、地域によって異なる伝統的な遊びに関する書物も著している加古さんではあるが、加古さんが特に力を入れたのが、子どもの好奇心を引き出す科学絵本、知識絵本というジャンルであった。

『かわ』や『宇宙』、『小さな小さなせかい』などの絵本で示されたミクロとマクロな眼には、科学絵本に注がれた子どもの興味・関心を掻き立てる精妙な仕掛けが凝らされている。その加古さんの科学絵本の魅力について生物学者の福岡伸一はこう評している。

「かこさとしさんは、典型的なマップラバーだと思います。マップラバーとは世界の成り立ちを鳥瞰的に捉え、それを整理し、端から端まで、最初から終わりまで、きちんと網羅し

尽くしたい、という切実な気持ちです。一種のオタク性ともいえます。私もマップラバーなのでよくわかるのです。……中略……目の前に美しいものがあればその美しさのもとを探りたい。川ならばそれをさかのぼり源流の湧きいづるところを見極めたい。勿論、それがどういう過程を経て姿を変え、最後にどうなるのかということも。」^{xxx}

加古さんの著した数多くの科学絵本や知識絵本は子どもの好奇心、幼稚園教育要領で言えば「興味・関心」につながる内容そのものである。子どもの持つ興味・関心の多様さについて加古さん自身は次のように語っている^{xxxi}。

「僕がもっとも興味を引かれたのは、子どもが関心を持ち、向かっていく対象が極めて多様なことでした。ひとくちに「昆虫が好き」と言っても、トンボが好きの子もいれば、バッタやコガネムシに夢中な子もいる。……（中略）……「子どもはみんなカブトムシが好きだろう」というのは大人の浅はかな考えです。どんなに立派なカブトムシやクワガタを用意したって、アリが好きな子はその辺を歩いてアリを見る。……それが本当にその子の「やりたいこと」であり、そこにこそ子どもの「個性」が表れるのです。」

「同じように見えて少しずつ違うことが肝心で、「多様である」というのはこの社会の特徴でもあるからです。……僕自身が繰り返し「大勢」を描くのは、自分が世界の中心だとはとも思えないからです。この世界は多様であり、自分は何処か隅っこにいる。でも、「隅っこでも世界の中なんだ」と言いたいのだと思います。」

身近なところから始まり、全体を捉え、それを単なる知識で終えずに、その自然の中に私たちが居るのだということを実感させる。その中で、加古さんは、幼児期に限らず自ら興味をもったものを納得いくまで探求し尽くすこと、それが子ども（人間）にとってもっとも重要なことであり、それを追求する中で子ども（人間）は自らを知り、自らと異なる他者、「多様性」に気付くことの大切さを示唆してくれている^{xxxii}。

この度の改訂でより強調された幼児期に求められる心情、意欲、興味・関心、延いては「幼児期のおわりまでに育ててほしい姿」に示された事項には、あたかも加古さんが絵本作家として拘り追求したものが反映されているかのようである^{xxxiii}。

10 「そういう子どもさんのね、興味の赴くままに追求していく姿勢というのを育てることがとても大事。その先にある「真の賢さ」を自覚しながら勉学に励むのが一番よい方法。……本人の学ぼうという意欲、追求しようという意欲が唯一と言っていいほど大事。是非意欲を持ったお子さんになって頂きたい」

V おわりに — 加古さんが大切にしたものとお子期の教育と遊び —

加古さんの仕事はお子期の教育の話だけに到底収まるものではないことは百も承知の上で、A I文化の足音に人間の活動範囲が脅かされるような話が至る処で囁かれる今だからこそ、敢えてお子期の遊び、そして遊びの中で考えること、自分の言葉で伝えることということの意味を問うために、加古さんを探り上げた。

今年の春に亡くなられた加古里子さんだが、一年前の2017年の春に、『だるまちゃんとしてんぐちゃん』の50周年特別インタビューで「遊びと絵本」について語っている。

その内容は、本論で取り上げてきた、汐見稔幸をはじめとする乳幼児の研究者が唱える資質・能力や学習成果（お子期の終わりまでに育ってほしい姿）をあたかも言い当てているかの様でもある。（もちろん、加古さんは「非認知能力」などと言ったりはしない）^{xxxiv}

「遊ぶことで子どもは成長し自立した人間になる。遊びという、自分の考えや判断で行う行為の中で、失敗や誤ちを多く重ねます。それがいいのです。……そして失敗を重ねることで、どんどん経験が増えていく。そうした貴重な体験が幼いときにできるのは遊びだけではありませんか。」

そうした「貴重な」遊びを守るための環境を整備するのが大人の役目であり、それは自然の保護や公園の整備といった外部環境を整えることよりもむしろ、精神的な環境 — 失敗が赦され、今、遊んでてもいいんだと思えるような雰囲気 — を作ることの方が大事だと加古さんは言う。（※これは安心・安定、「養護的な環境）」という言葉で今回の幼稚園教育要領、保育所保育指針で強調されている。

「率先して遊びに誘ってみたり、知らない遊びを教えてやったりのご苦勞は不要で、大人はしゃしゃり出ない方がよいのです。ぼくが絵本でしてきたのもそういうことなんです。幼い頃の遊びの体験は、その人の根幹となっていきます。つまり、子ども時代の遊びの積み重ねが、社会性を持った生き物、人間を育てていく。ひいては人間のさらなる進化にもつながるのではないか。ぼくはそんなふう考えているのです。」

加古里子さんの作品の奥深さ、面白さは言うまでもないだろう。しかしながら、筆者自身も含めお子期の教育に携わる者（実践としても理論としても）であれば、五領域どとか非認知能力とか、資質・能力云々言う以前に、その絵本から学ぶものが沢山あることを知っておく必要があるだろう。そして、それが子どもの「本当」なのだ（佐伯流に言えば「ホントの本当」）、謙虚に学ぶ必要がある。

非認知能力の重要性が叫ばれ、遊びと大人のかかわり、言葉と身体性の関係が重視される今だからこそ、70年間、子どもと遊びにむけられた眼差しとその意味について描かれた加古さんの絵本は人間独自のもつ力の可能性（A I文化に向き合う上で、人間により求められ

るもの)を示すものとなっている。

そして生活の中で子どもをよくみて、子どもの声をきくことを通し、そのひとつひとつの声に対して自らの作品で応えた加古さんの姿勢にも驚きと共に敬服した。彼のように子どもの生活と現実から、遊びと遊びの中で育まれる言葉の多様性と思考(=考えるということ)について紐解くこと、興味・関心と知識が一体となった事柄について考えていくことが、これから大人の側に求められるであろうことにもっと自覚的でありたい。そして、A Iと共存せざるを得ないこれからの社会において、「教育にいったい何ができるのか」常に問い続けたいと思う。

註

- i 無藤隆『学習指導要領改訂のキーワード』明治図書 2017年2月 保育教諭養成課程研究会(6月4日)の資料<https://www.facebook.com/notes/takashi-muto/>「今後の幼児教育の方向とは幼稚園教育要領保育所保育指針幼保連携型認定こども園教育保育要領の改訂ポイント」2017年3月2日付、にもある。
- ii 汐見稔幸は平成28年～29年にかけて、至る所(例えば、平成29年4月11日の臨床幼児教育研究会や同6月3日保育教諭養成課程研究会)での改訂の主旨説明において、「養護的な環境とは保育・幼児教育に限らない、小学校以降も生涯に亘り続く学びに没頭できる環境を保証することである」と言い続けている。
- iii 文部科学省初等中等教育局のHPなどでも、今回改訂の目玉といわれるカリキュラムマネジメントについて「学習指導要領等の理念の実現に向けて必要な支援方策」と、回の改訂が大きく舵を切るものであることが明示されおり、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364319.htm また心の哲学研究者であり、第三世代認知科学の基礎に関する研究からA Iと人間の関係等について語る河野哲也は、A Iの台頭は人類史的にも文字に次ぐ大転換であるとする。高等教育フォーラム シンポジウム「人工知能に代替されない能力とその教育を考える」2018年3月 於京都大学
- iv 井上智洋『人工知能と経済の未来』文春新書 2016年7月 pp.20-32。この課題意識は拙稿「幼稚園教育要領改訂における“ことば”の育ち—領域「言葉」の中のおよび・きくの射程—」『淑徳大学短期大学部紀要』58号 2018年3月にも示している。
- v 加古里子『未来のだるまちゃんへ』文春文庫 2016年 pp.30-34には人気キャラ「だるまちゃん」を例に加古さんの子ども論の一端が示されている。
- vi 新井紀子は、『AI vs 教科書が読めない子どもたち』(2017年12月)。または、2017年3月20日京都大学での「高等教育フォーラム」において、あくまで、現時点でとしながら、意味の読み取りや自然言語の意味生成の壁に関して、A Iはしばらくは越えられないとしている。
- vii 今年度出された『幼稚園教育要領解説』2頁の「改訂の基本方針」には、②「育成を目指す資質・能力の明確化」に続き、③「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進、④各学校におけるカリキュラムマネジメントの推進、⑤言語能力の確実な育成、伝統や文化に関する教育の充実、体験活動の充実などが示されており言語と身体、所謂直接的な体験などによる身体を伴う「やってみる」「試してみる」行為がより強調されている。
- viii 前掲書 井上 pp74-85にはA Iが越えられない壁として2017年現在「言語」と「生命(欲求)」が挙げられている。新井紀子も『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』2018年2月 東洋経済にて同様の指摘を行っている。

- ix http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/nerai.htm 文部科学省「幼稚園教育要領」
- x 秋田は1983年「早期教育は何を育てるか」『発達』4巻14号のなかで、汐見は2003年「早期教育という幻想」『環』vol.15で、幼児期の心情を伴った「経験」が学ぶことの意味を生成し、本当の意味で「わかる」ことや意欲、探求心などの興味の持続に繋がることを記している。早い時期に言葉を「教え」てもそれらは剥がれ落ちてしまうことはもはや言うまでもない。汐見、秋田以外にも広瀬友紀『小さい言語学者の冒険』岩波科学ライブラリー 2017年 岩波書店 50頁以降にはその仕組みが面白く描かれている。
- xi 例えば、ヴィゴツキー『思考と言語』をはじめ、楠見孝『思考と言語（現代の認知心理学3）』、今井むつみ『ことばと思考』など多くの著名な心理学者が論じてきている。
- xii 文部科学省の掲げる「子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題」には、乳幼児期の重視すべき課題として①愛着の形成（人に対する基本的信頼感の獲得）②基本的な生活習慣の形成に続き、③道徳性や社会性の芽生えとなる遊びなどを通じた子ども同士の体験活動の充実があり、社会性や対話といった「誰か」とのつながりを必要とする社会情動スキルに近いものが含まれるようになっている。
- xiii 文部科学省『幼稚園教育要領解説』206頁。
- xiv 広瀬友紀『小さい言語学者の冒険』岩波書店 2017年 50-57頁には、字を知らないからこそわかること、子どもが過剰な一般化から必要な修正をかけて「縮小する」複雑さを経ていつの間にか正しい形を身に付けていることなどの事例をもとに面白く説明している。言語は教えてもらって覚えるものという捉え方が如何に狭量か、気付かせてくれる。必読である。
- xv 前掲 広瀬友紀 15頁には、濁音の「ぢ」、「じ」の違いに拘る様子や「蚊に刺されて血が出た」を「かにに」さされて「ちがが」でたとする子どもの促音と1拍単語への対応など、文字を覚える前だからわかっている高度な「誤り」の事例が示されている。
- xvi 佐伯 胖は、刈宿俊文主催「学びとアート」の関係を問い直す講演 2013. 6. 16. に於いて、学びと勉強の根本的な違いから、アンラーン（学びほぐし）まで、人間の営みとしてA Iとの関係から組み直さねばならない学びや知識の概念についてわかりやすく説明している。
- xvii 佐伯は『学びの構造』東洋館出版 1985年の中でも、学びとは何か、学びと勉強の違いなどに触れながら、分析知と統合知について説明している。
- xviii 前掲 広瀬 50頁の冒頭。
- xix 前掲 佐伯 胖 2013. 6. 16. 講演録。
- xx 佐伯 胖『考えることの教育』国土社 1990年 pp.87-93において「納得の重要性と仕組み」について示されている。
- xxi 我が国の認知科学の第一人者、佐伯 胖はこうした戦後の学力論争（二つの二項対立的な議論および勝田守一や藤岡信勝らの知識-経験等の学力論争）に対し、「学び手の側の認知過程を加味する」というまったく別の角度から「あっさり」と決着をつけた。
- xxii 今井康雄「学力をどうとらえるか-現実がみえないグローバル化の中で-」、山内紀之「グローバル社会における学力」共に田中智志編『グローバルな学びへ』東信堂 2008
- xxiii 神戸大学の北野幸子は、「幼児期の教育は子どもの自由な発想から生まれる主体的な遊びを中心とした教育である点から見ると、基本的にはアクティブ・ラーニングと言える。五感を通して、身体を使って、感情を動かして学んでいる姿こそが、アクティブ・ラーニングである」という。北野幸子「改訂を踏まえた今後の乳幼児教育の在り方について」講演録 2017. 8. 8. 於 兵庫県立但馬長寿の郷)

- xxiv http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/index.htm 中教審 教育課程部会 幼児教育部会 <http://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=3684> およびベネッセ教育総合研究所「幼児期から小学1年生の家庭教育調査・縦断調査」2015<平成27>年
- xxv 秋田喜代美 第1章「現代日本の保育」『あらゆる学問は保育につながる』pp18-22 東京大学出版会 2016年3月。また、心理学の遠藤俊彦も同7章「子どもの社会性と子育て・保育の役割」でこの非認知能力ー社会性のへの関心の高まりについて記している。pp225-235.
- xxvi J. J. ヘックマン『幼児教育の経済学』2016年 東洋経済新報社。言わずと知れた2000年にノーベル経済学賞を受賞したジェームズ・ヘックマンによるペリー就学前プロジェクトのことであるが、サンプル数が100人と数が少ないこと、同様の実験を大規模なサンプル数で展開してみたものの成果が見られなかったケースもある等の否定的な成果は提言に加味されていないとの批判もある。
- xxvii この幼児の遊びの本質については、汐見稔幸は至る所で著し、語っているため却ってエビデンスとして提示するのが難しい位わかり切ったことだが、例えば、「遊びこそ、学びです」『母の友』767号2017年4月 pp20-21の中で極めてわかり易く保護者向けに記している。
- xxviii 前掲 汐見「遊びこそ、学びです」『母の友』767号2017年4月 24頁.
- xxix 松居 直「加古里子さんの絵本ー伝統文化と現代科学のコンビネーションー」1977年4月号.
- xxx かこさとし、福岡伸一『ちっちゃな科学 好奇心が大きくなる読書&教育論』中公新書 2016年 pp161-162.
- xxxi 前掲 かこさとし、福岡伸一 pp33-36.
- xxxii 『現代思想 9月臨時増刊号 総特集*かこさとし』青土社 2017年8月
- xxxiii 前掲 かこさとし、福岡伸一 56頁.
- xxxiv かこさとし 特別インタビュー「遊びと絵本」『母の友』767号2017年4月 pp33-36

〈引用・参考文献〉

- ・『別冊太陽 かこさとし 子どもと遊び、子どもに学ぶ』平凡社 2017年
- ・かこさとし『未来のだるまちゃんへ』文春文庫 2016年
- ・『ちっちゃな科学 好奇心が大きくなる読書&教育論』かこさとし 福岡伸一 中公新書 2016年
- ・『現代思想 9月臨時増刊号 総特集*かこさとし』青土社 2017年8月
- ・『母の友』767号2017年4月
- ・秋田喜代美ほか『あらゆる学問は保育につながる』ほか 東京大学出版会 2016年3月
- ・佐伯 胖『学びの構造』東洋館出版 1985年
- ・佐伯 胖『考えることの教育』国土社 1990年
- ・広瀬友紀『小さい言語学者の冒険』岩波書店 2017年
- ・文部科学省『幼稚園教育要領解説』2018年
- ・田中智志編『グローバルな学びへ』東信堂 2008年
- ・井上智洋『人工知能と経済の未来』文春新書 2016年7月
- ・新井紀子『AI vs 教科書が読めない子どもたち』東洋経済 2017年
- ・佐伯 胖 大豆生田啓友『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房 2013年